

【論文】

カリブ海と『ロビンソン・クルーソー』

磯山 甚一

The Caribbean Sea and *Robinson Crusoe*

Jinichi ISOYAMA

1983年に開園した東京ディズニーランドには、「カリブの海賊」という名称の人工空間が造営されている。それを一つの例として、今日の日本には「カリブ海域」に関わる言説が多方面に見られ、英文学史上の小説作品として知られる『ロビンソン・クルーソー』もその一つである。ところがロビンソン・クルーソーの物語のテキストは、17世紀後半のカリブ海域をめぐる言説であることが隠蔽されて今日の日本に流通している。ロビンソン・クルーソーの暮らす島が「絶海の孤島」であるというのは、何かの理由によってつくりあげられた思い込みによる誤解である。コロンプスの新大陸「発見」を契機にして西ヨーロッパの列強が新大陸に競って進出し、全地球を巻き込む「近代世界」というシステムをつくりあげた。そのシステムの形成過程のなかに位置付けることによってロビンソン・クルーソー物語を理解することが重要である。

キーワード：カリブ海、ロビンソン・クルーソー、デフォー、英文学史、近代世界システム

目次

I カリブ海

- ①カリブの海賊
- ②ロビンソン・クルーソー物語
- ③カリブ海域の表象

II 英文学史とロビンソン・クルーソー物語

- ①『ロビンソン・クルーソー』はどこにある？
- ②絶海の孤島

—— 以下次号に掲載 ——

Ⅲ 近代世界の中で

- ①近代主義的読解
- ②フライデーと命名された男——人種
- ③ロビンソン・クルーソーの妻——ジェンダー

I カリブ海

①カリブの海賊

私は子どもに連れられて東京ディズニーランドに入場したとき、そこに提供されている種々様々な「エンターテインメント」の一つに、「カリブの海賊」という名称を与えられた空間があることに気づいた。それは全体が薄暗がりになった、地下に閉ざされた空間として、例によって莫大な資本を投入して製作された巨大な舞台装置とでもいうべきものである。チケットを購入してディズニーランドに入場を許可されただけでは、直ちにこの空間に入るわけにはいかない。入り口で係員からチケットのチェックを受ける前に、混雑するときには相当の時間を並んで待つ時間に費やさなければならない。やっと小さなボートに乗り組んだあとは、乗員の一人として地下に潜入していく。人々は、観客というよりはむしろ演技者であることを強いられ、しかも「子供を演じる」(Baudrillard 1992:155) のである。それは15～6人乗りのボートであろうか、操舵装置は一切ついておらず、水の流れに沿って移動するかのような仕組みになっており、多分、乗員の安全性については入念な現代的工夫が加えられているのであろう。もちろん、その空間を造営した意図を裏切らないようにするため、安全に関わる装置は入念な隠蔽が施されている。だから、乗員の移動は水に乗って、あたかも自然の水流に身をまかせるがごとく、または、自分の意志によるがごとく錯覚するように行なわれる。

その移動につれてわれわれは、水路に沿って陸地風の部分に造営されたあらゆる種類の人工物に出迎えられる、というわけである。以下、「ウォ

カリブ海と『ロビンソン・クルーソー』

ルト・ディズニー・プロダクションの嘱託の仕事」をしたという能登路（1990）による、カリフォルニアのディズニーランドの記述を参照して記述してみよう。カリフォルニアも東京も、「カリブの海賊」は基本的に同一構造であると思われるからである。最初にボートは平原を流れるように見える川に沿って進む。岸边には薄暗がりのなかにレストランで食事をする客の様子が見える。続いて、洞窟風に作られた穴に流れ込む急流に乗って落ちていく。すると両側にはあたかも岩のように見える壁状構造物が続き、所々には財宝や人間の骨などに見えるものなど、「海賊」という名称から観客が期待する（演技者が欲する）多くの怪奇趣味的な大道具、小道具類が並べられている。やがて大きな空間に誘い込まれると、一見して海賊船と思われる大きな船が水に浮かび、大砲などの火器類があたかも実際に火を放つかのような様子さえ見ることができる。

さらに進むと、それらの人工物の一角が海岸線の街角風に造営されているところでは、海賊に襲われた港町で行なわれる拷問の様子と思われる光景がある。その後で、女性（白人、つまりヨーロッパ系の女性）が5～6人で一緒に並んで立ち、彼女らは縄で縛られている風で、どうやら拘束されているらしい様子である。彼女たちは、何やら怪しげな造作の家屋の前に並んで立っており、その家屋には板材に似せた看板風のものに取り付けてある。薄暗がりのなかで目をこらせば、そこに書かれた文字をなんとか読むことが可能である——“ Take a Woman for a Bride ”（嫁さんにいかが）と。つまりそれは、カリブ海で行なわれている人身売買の光景と理解すべきであろう。それが英語で書かれているということで、イギリス人が支配する土地の様子であると想定される。ディズニーランドという想像された空間にはおよそ似つかわしくない！と疑念を起こさせる。

いやいや、もしかしたら、カリブ海において実際に起こったと想定されることを、歴史の表舞台には出ない暗い部分も含めて「忠実に」再現しようとする、この空間の製作者の配慮であったかもしれない。あるいは「海賊」という名称から予想される男たちだけの世界に、本当らしさのある何

かしら女性的な要素を持ち込もうとする配慮であったのだろうか？ あるいは、ひょっとすると、現代のフェミニズムの立場から、カリブ海域における女性の姿の一端を再現することによって、今日も続く男性中心主義への抗議を表現したのかもしれないし、そのような野蛮な時代はめでたく脱したとみなせる世界に住む自分たちをそれと対照させて、自分たちの幸運に改めて胸をなでおろすということなのだろうか。あるいは、そんな野暮なことを言うのは愚の骨頂で、こういう意図とは一切関係なく、大衆に娯楽を提供しようという商業資本の意図によって出来上がった結果かもしれない。

東京ディズニーランドに現出した「カリブの海賊」の例を持ち出したのは、現在のカリブ海、あるいは歴史上のカリブ海をめぐるわれわれの意識に、日本に現出したその人工物は大きな影響を与えているはずだからである。「海賊というアメリカ人の共同幻想」(能登路1990:149)を演出しているという「このショーは、一九世紀前半にカリブ海に跳梁した海賊という、ある時代にある場所で起きた現象をその源泉としている」(能登路1990:159)と説明される。だが、「カリブの海賊」と名付けられる海賊たちがカリブ海で最も勢力をふるって「跳梁」したと言えるのは、19世紀よりもかなり以前にさかのぼり、17世紀後半から18世紀初めのことである。

カリブ海の歴史には確かに海賊を省くことはできない。カリブ海域史では必ず言及される。例えばE・ウィリアムズの名著『コロンブスからカストロロまで——カリブ海域史1492 1969』では、「海賊といえば、あらゆる国籍、あらゆる宗教をもつならず者が、大ていはただ法網を逃れた罪人であるという事実だけで結託したものであり、スペイン人を襲撃することだけが彼らの唯一の仕事であった」(ウィリアムズ1978:94)とのべてある。さらに増田義郎『略奪の海カリブ——もうひとつのラテン・アメリカ史』では、「この海賊たちは、俗にバッカニアと呼ばれていた。国籍はさまざまだったが、フランス人、オランダ人、イギリス人が多かった。『彼らの数はふくれあがり、カリブ海をわがもの顔にのし歩いて、エスパニャ〔つ

カリブ海と『ロビンソン・クルーソー』

まりスペイン]船を襲い、港を焼いた。パッカニアの全盛期は、1660年ごろからはじまる」(増田1989:109-111)という。

コロンブスがスペインのカトリック両王から援護を得て大西洋を航海し、新大陸との往来を実現して以後、そのカリブ海域ではスペインが支配権を握っていたが、そこに後から侵入してきたイギリス、フランス、オランダなどのヨーロッパ勢の勢力争いに、国の後ろ盾を得た海賊たちが利用された。すなわち、私掠船(privateer)である。「一七世紀なかば、ヨーロッパ諸国が争い合い、カリブ海が各国間の闘争で騒然としていたとき、私掠船とは、国の政府、たとえばイギリスの場合海軍法廷などが、交戦国の船、とくに商戦を攻撃していいという「私掠免許状」を与えた。」「これに対して海賊船は、高官や王のうしろだてもなければ免許状も持たない略奪専門の船で、交戦国の船であろうとなかろうと、ときには自国の船までも襲撃する略奪者、と解してよい。だから、つかまれば、犯罪者として刑をうける」(増田1989:120-1)。だが、18世紀になると、カリブ海におけるスペインの衰退は明白となり、イギリス、フランス、オランダなどの列強が、私掠船による略奪行為を抑止する方針をとった。すでに1699年には、イギリスで海賊取締条令が制定されており、そうして、カリブ海における海賊の世界そのものが目立たなくなった。海賊たちの全盛期は、1660年から1699年にかけての17世紀後半ということになる。

ただし、そういう法を逃れる形で略奪を行なう、私掠船ではない本来の意味での「海賊」は、カリブ海域周辺を含めて、以後19世紀の初めまで生き残ったのは確かである(もちろん、今日までも)。19世紀の海賊の中では「ラフィット」の名が特によく知られている。「一九世紀前半にカリブ海に跳梁した海賊」とはこのラフィットを含む言及であろう。ただし、そのラフィットは確かにカリブ海域に属する「小アンチル列島のグウドループ島へ出かけて、掠奪をはじめた」こともあったが、その後「活動の本拠をバラタリア島に定め」たのであり、その島というのが、「ミシシッピー河口の西で、デルタ地帯に」(ユベール・デシャン1965:109)あったので

あるから、彼を「カリブの海賊」と呼んでいいかどうかはむずかしい。上に述べた事情から言えば、19世紀の「カリブ海」について、海賊が跳梁していた、という言い方をしているかどうか、疑問は残る。それにもかかわらず、ディズニーランドでは「カリブの海賊」という言い方をしている。「カリブ」と「海賊」が結びつくべき、何か特別の理由があるかもしれない。

「カリブの海賊」を含む東京ディズニーランドが開演したのは、日本が第二次世界大戦直後の貧しさから、「国民」としての指標で言えばほぼ近代化を成し遂げ、世界でも有数の「国民所得」上のポイント、すなわち「豊かさ」を手に入れたことが明らかになりつつあった1983年4月15日のことである。それを指して、1990年時点で80年代を振り返った能登路（1990）は、「八〇年代の日本における最大の文化的事件であった」（能登路1990: 225）と位置づける。「文化的事件」とはどういう意味で用いているのかについては、またのちほど検討することにしよう。ここでは、そのディズニーランドに、歴史上の事実とは少し離れた形で造営された人工物としての「カリブの海賊」があることを確認しておきたい。

東京ディズニーランドを訪れる幼い子供たちは、そのカリブ海がどこにあるかをまるで知らないし、その地域について地球上の位置関係なども明確には認識できないだろう。だがそういう子供たちさえもが、この人工物の疑似空間を体験した後では、「カリブ」について話ができる。そこにある「カリブ」は、文章表現によるテキスト言説としてわれわれに与えられるものではないが、感覚に直接訴えかける、まことに現代的な手法として、おそらく学校教育が足元にも及ばない「教育」としての強力な機能を備えていると言うべきであろう。

現実には、カリブ海は日本から見てほぼ地球の裏側にあたり、そこに行こうとすれば、いくつかの経由地を含む長時間の旅を覚悟しなければならない。それらの多数の島々は、もしわれわれが行きたいと望んでも、船便が張り巡らされているわけではないだろうから、必ずしも行ける所ばかり

カリブ海と『ロビンソン・クルーソー』

りとは限らないのだが、最近のある調査によれば、「カリブ」は今日の日本人が「一度は行ってみたいあこがれのビーチリゾート」のトップに名前があがっている（2000年7月8日付け日本経済新聞）。ただ、「カリブのどこに魅力を感じているのか」は、「何となく」「映画やテレビで見たから」「イメージがよい」など、「漠然とした内容が多かった」のである。また、「カリブ」と目立つ書き方をして旅行客に宣伝をするパンフレットには、メキシコ領の太平洋側のリゾート地も一緒に掲載されており、それらは本当のところ「カリブ海域」には含まれない。「カリブ」の人気にあやかって売り込もうというわけで、カリブの名が大きな宣伝効果を持つことの証左であろう。また中部アメリカの一海域にすぎない「カリブ」の名称が、宣伝パンフレットでは「ヨーロッパ」「オセアニア」「アジア」と並んで列挙されること自体、「カリブ」に尋常ではない影響力があることを示唆するであろう。

というよりも、それだけ知名度をあげ、観光地として浸透させるため、観光業界がそれに見合うだけの投資をしていると見た方がよいかもしれない。そして、カリブ海リゾートとは、カリブ海域のごく一部、しかもリゾートとして「開発」された所だけであることを銘記すべきである。それらリゾートは、日本など「先進国」の消費者向けに企画され、そこにあるホテルはおそらく先進国から投下された資本で運営されている。国は違っても、資本主義経済には国境はない、金の流れは止めようがない、というわけである。結果としてその海域はツーリズムにおいて人気のある地域に位置付けられ、現地でも大きな産業になっているだろう。

だが、ツーリズムを売り物にする地域に共通すると想像されるのだが、パンフレットに掲載される豪華なホテル群に目を奪われると同時に、その裏面があることに気づかなければならない。「こんにち、こうしたカリブ海の島々はそのほとんどが、道路も、学校も、住宅も、人々の生活水準そのものも劣悪な状況で、「開発途上国」といわれる状態にあります」（川北1996:43）というのが実情である。「かつては希望の星とみられたカストロ

のキューバも、経済的苦況は覆うべくもない」のであり、「1804年にフランスから独立し、西半球における最初の黒人の独立国となった輝かしい歴史をもつハイチも、世界でもっとも悪質とさえいわれる独裁国家となっており、経済水準は極度に低い」（川北1997:69）。これが今日のカリブ海域の実情なのである。

「カリブ」という言葉が用いられて割合よく知られたもう一つの例としては、日本の最大手自動車会社製の商品名がある。この名を冠したクルマは、最初1982年に発売されたものである。東京ディズニーランドが開園する前年にあたる。日本の近代化がある意味で達成されて、その経済の「成長期」がほぼ頂点に達していた頃のことである。日本が「国民所得」の指標で見れば世界でも指折りの国になり、そこで暮らす「日本人」がそろって低賃金で長時間働く人ばかりという時期がほぼ終わりを告げ、「ゆとり」や「レジャー」などに目を向けることができるようになったところで、「カリブ」というその言葉が喚起する実用性一辺倒とは違ったイメージを利用したものと推測する。東京ディズニーランドが開園した1983年は、「レジャー元年」というのだそうである（能登路1990:226）。

もう一つ、「カリブの海賊」や「カリブ海リゾート」ほどは一般に馴染みはない事柄に属するが、日本語で「食人慣習をもつ種族」を表わす「カニバル(cannibal)」という英語の単語がある。実はこれは、「カリブ(carib)」を語源とする言葉なのである。研究社から出版される日本で最も権威のあるとされる『研究社新英和大辞典』（1980年第5版）では、「cannibal」の項には、「Columbusの記録に初出；Carib人は食人種だったことから」という語源に関する記載がある。

カリブ海の先住民が「食人慣習をもつ種族」であるという報告は、確かにコロンブスの第1回航海の記録に現れる。その最初は、『コロンブス航海誌』の1493年1月13日の記載である。カリブ海の先住民がそういう人々であるという考えの起源は、ヨーロッパと新大陸の最初の出会いにまでさかのぼり、しかも、そうだと考えたときの記録が残っていることになる。

カリブ海と『ロビンソン・クルーソー』

ただ、この『航海誌』自体が、コロンブスが記載したとされる航海日誌を、ラス・カサス神父が「要録した」ものであり、それだけしか現存しない。さらにこの「カニバル」に関する記載は、コロンブスが実際に食人の行為を目撃したわけではなく、「カリブ族」についてコロンブスが他のインディオから聞いた話として、コロンブスが言っているにすぎない。というわけで、実にまわりくどい事情がある。

また、コロンブスの第2回航海（1493～96年）に同行したチャンカ博士の記録にも「人間の肉を食べるカリベ族」と記載されている（『完訳コロンブス航海誌』史料四）。しかし、「男性のものである腕と足の骨を四、五本持ち帰りました」という機会に発せられたこの言葉も、「カリブ族」に関する単なる推測として記述されている。結局、「カリブ族」が本当に食人種であったかどうかは、歴史の闇のなかにあると考えた方がよさそうである（これについては、岩尾「浮遊する食人種記号」（1999）が興味深い論考をしている）。

この言葉はスペインからフランスにも伝わって、1578～80年頃になると、モンテーニュ（1533～92）の『エッセー』の第31章は、そのものずばり「人食い人種について（cannibales）」という題名がつけられた。『オックスフォード英語辞典』によれば、英語で‘cannibal’が最初に用いられたのは1553年のことである。

②ロビンソン・クルーソー物語

さらにもう一つ「カリブ」に関わるものとして、ロビンソン・クルーソー物語のテキストがある。この物語は、英文学史上で最もよく知られた作品の一つに数えられ、日本語にも度重なる翻訳が出されている。また様々な形で模倣や翻案があり、作品についても解説や紹介がなされているので、実際に作品を読んだことのない人でさえも、その物語の内容について何らかの知識をもっていることであろう。その物語の中で最もよく知られているのは、主人公が島に漂着して孤独に生活するところである。それが「カ

リブ海」に実在するとされる島を舞台にして繰り広げられることになっている。しかも、先に紹介した1660年代からの「バッカニアの全盛期」、すなわち海賊が最も盛んな活動をしていたのとちょうど重なる時期なのである。それなのに、この事実はその物語の今日の読者にはほとんど意識されることがないと言っているだろう。

ところが、ロビンソン・クルーソー物語は、実はそういう孤島での生活を記した部分だけではない。ロビンソン・クルーソーの名を冠した作品も一つだけではないのである。出版の時の事情を言えば、ロビンソン・クルーソーの名を冠した物語は、『ロビンソン・クルーソーの生涯と不思議で驚くべき冒険』(1719年出版)、『ロビンソン・クルーソーのその後の冒険』(同じく1719年出版)、『ロビンソン・クルーソーの生涯と驚くべき冒険の間の反省録』(1720年出版)の三部作がある。通例として、それらのうち最初のものが単に『ロビンソン・クルーソー』として言及されている。日本でもイギリスでも、英文学史上で単に『ロビンソン・クルーソー』として言及した場合は、最初に出たこの『ロビンソン・クルーソーの生涯と不思議で驚くべき冒険』を指すとみなして間違いはない。どういう事情でこんな事態になったのかは、後に検討する課題ということになる。

ちなみに本論との関係でいえば、ある興味深い説が浮上している。海賊と関係することである。1724年になって、『最も悪名高き海賊たちの略奪と殺人の物語』(邦訳では『イギリス海賊史』)という題名の書物が出版された。当時の海賊の歴史を知るための文献にさえなっているテキストである。その著者は「チャールズ・ジョンソン」という名前になっているが、この本の著者が、実はダニエル・デフォーであるという説が有力になっているのである。 *The New Cambridge Bibliography of English Literature* (Cambridge, 1971) もその説を採用している。「チャールズ・ジョンソン」はデフォーとは別の実在人物と長い間考えられ、偽名であろうという但し書きはついているものの、『英国人名辞典 (DNB)』にさえ記載されたいわくつきの名前である。

カリブ海と『ロビンソン・クルーソー』

一連のロビンソン・クルーソー物語も、出版の事情としては似ている。ロビンソン・クルーソーというヨーク出身の人物が実在し、実際にそういう孤島での体験をした人物によって、「本人によって書かれた」ことになっているからだ。例えば、ロビンソン・クルーソーが漂流して島にたどり着く事情に注目してもよい。17世紀後半の歴史としてカリブ海をめぐるヨーロッパ人、アメリカ先住民、アフリカ人の動静は、当然受けるべき注目を今日やっと受けつつあると言えるだろうが、そのようにして明らかになりつつある事情が、日付とともに丹念に書き込まれているのである。すなわち、ブラジルで農園を経営していたその彼が、アフリカのギニアへ航海を計画する。それによって、その農園で労働者（つまり奴隷）とすべき黒人をブラジルに運び込もうというのである。その航海に出発するのは、テキストの中に明記してあるとおり、1659年9月1日である。その航海途上に嵐に遭遇して難破し（カリブ海では夏から秋にかけてハリケーンがあるというから、この日付も理にかなっている）、ある島にたどり着く。その後の24年間はそこで孤独のうちに過ごし、さらにその後の4年間は、偶然に出会ったカリブ海先住民の一人とともにその島で過ごすことになる。インドに辿り着いたと思ひ込んだコロンブスの誤解がもたで、スペイン語でインディオ、英語ではインディアンと呼ばれる先住民であり、「カニバル」すなわち「食人種」ということになっている。

そのロビンソン・クルーソーの生活する島が、カリブ海に位置する島である。南アメリカ大陸の大河の一つに、オリノコ川という川がある。大陸の中央を源流として、全長2千キロにおよび、カリブ海に注ぐ。すでにコロンブスの第三次航海（1498年）にその河口が発見されている（完訳『コロンブス航海誌』392）。その河口近くに位置する島々の一つが、ロビンソン・クルーソーの島である。「われわれの島はじつにこの河の河口という湾内にあったのだ。そして、西および北西に見える陸地は、オリノコ河口の北部にあるあのトリニダード島だったのである」（平井正穂訳（上）288）と、テキストにも記してある。注目すべきは、西と北西側には別の

島が見渡せることである。デフォーは「その他のカリブ海の島々に生涯変わらない興味を抱いていた。バルパドスのほか、特にキューバ、ジャマイカ、それにクルーソーが難破したトリニダード、ドバゴである（West 1999: XVII）。また、『ロビンソン・クルーソーの生涯と不思議で驚くべき冒険』が書かれたのと同年にあたる1719年に、「デフォーは『サー・ウォルター・ローリーの航海と冒険についての歴史的説明』を出版し、クルーソーの島があるオリノコ地域の植民地化を提唱した」（ヒル1999:168）というように、ロンドンのジャーナリズムにおいて特別に取り上げて話題となりうるような地域である。

カリブ海域の先住民は、コロンブス以来のヨーロッパ人との接触の結果として、コロンブスの航海後約1世紀のあいだにほとんど絶滅した。現在は、アフリカから奴隷として連れてこられた黒人の子孫たちが主体となって住む国々がそこにある。先住民が絶滅した結果、ヨーロッパ人と先住民のあいだで、いったいどのような相互作用があったのか、それはいまだに全体像は明らかではない。その有様を記した文献といえば、ヨーロッパ人から見た記述しか現存しないからである。ただし、少しずつ明らかになりつつある部分もあり、例えばエスパニョーラ島（現在のハイチ、ドミニカを含む島）の人口動態については、こう述べられている。

1492年のエスパニョーラ人口は20万ないし30万であったが、1508年には6万にまで減少...1514年には1万4000人になってしまったといわれる。...1570年ともなると、エスパニョーラのインディオは、たった2集落を残すだけとなってしまった。（ウィリアムズ1978:27）
現在ではこれらの数字が信憑性があるようである。だが、その当時のカリブ海域に実際に渡航し、実際にその現状をつぶさに記述した人物に、ラス・カサスがいる。ラス・カサスは「1514年から1566年に世界するまで、6回にわたり大西洋を横断し」たスペインの司教である。彼はもっと劇的な数字をあげている。

われわれがはじめてエスパニョーラ島に上陸したとき[1502年]、島

カリブ海と『ロビンソン・クルーソー』

には約三〇〇万人のインディオが暮らしていたが、今では[1552年] 僅か二〇〇人ぐらいしか生き残っていないのである。(ラス・カサス 1976:19 20)

ロビンソン・クルーソーが1659年に漂着し、24年後(計算上1683年)に先住民と出会うことになる島が属する小アンティル諸島の事情は次のとおりであった。

小アンティル諸島に到着したヨーロッパ人は、その地にはまばらにしかが人が住んでおらず、それも彼らの侵入に対してしばしば敵意を示す、好戦的なカリベ族がほとんどであることを知った。叛乱も頻発したが、一七世紀末頃までには、かなり安定したパターンが成立した。すなわち、カリベ族はほとんど殺戮され、生き残った者も、ドミニカ島やセント・ヴィンセント島へ追い払われてしまった。(ウィリアムズ1978: 113)

すなわち、ロビンソン・クルーソーが漂着した島の近くに位置する島は、その17世紀末においても、「カリベ族」(カリブ族の別の表記法)がわずかながら住んでいた可能性はないわけではない地域にあたる。ただしその島は、「豊穡な島」(ラス・カサス1976:109)と称えられたトリニダード島に隣接する。そのうえに、オリノコ川の河口近くに位置し、ロビンソン・クルーソーの暮らしぶりから判断して生態学的な環境も悪くないように思われる島である。そこで人が24年間も孤立したままで暮らせるほど、17世紀末のカリブ海で貪欲なヨーロッパ人たちの視野に入らずに放置されていたとは考えにくい。それに、ロビンソン・クルーソーが出会うその先住民は、集団間の抗争の結果として島に現れることになっているが、みずからの民族自体がヨーロッパ人の侵入を受けて絶滅の危機に瀕しているときに、内部抗争をせられる余裕があったとは思われないのだが。

ロビンソン・クルーソーの島に関する以上のような地理的な位置関係は、例えばペンギン版(これも表紙のタイトルは素っ気なく単に *Robinson Crusoe* であるが)の23ページには初版のタイトルページが印刷されてい

る。それを読めば、読者はすぐにその位置に気付くはずである。だが、邦訳本となると、簡単に『ロビンソン・クルーソー』とか『ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険』としか記載されず、原著のタイトルページに明記されるその他の部分は省略される。

物語を紹介したり解説したりする文章からも、「カリブ」の名は消えるのが普通である——例えば、「ロビンソン・クルーソーというひとりの男が、難船して大洋の無人島に漂着する」(中野好夫1995:336)物語、「絶海の孤島での冒険」(同338)の物語だというのである。カリブ海やオリノコ川どころか、「大洋の無人島」「絶海の孤島」になってしまっている。また、その島を「絶海の孤島」と本文中でも表現した翻訳書もある(平井正穂訳『ロビンソン・クルーソー』上巻54)。それにあたる原文は 'an island of meer desolation'(人のいない島)なので、「絶海の孤島」とは訳せないはずである。ちなみに「大洋」とは、辞書によれば、「大陸を包囲する大海」ということ、「絶海」とは、「陸地から遠く離れた海」ということである。オリノコ川河口の湾内に位置する島をそのように言い表わすことは、常識的に考えて不可能である。翻訳者には、それを「絶海の孤島」と訳すことが必要に思われたということなのである。

ロビンソン・クルーソーの島が「絶海の孤島」のような隔絶した環境ではなく、南アメリカ大陸沿岸にほど近いカリブ海に浮かんでいるというこの事実は、英文学の本国イギリスにおいてさえ、ロビンソン・クルーソー物語のテキストをめぐる批評的言説において長いあいだ意識されることがとても少なかった。そういうわけで、「『ロビンソン・クルーソー』をカリブ海域に差し戻すことを試みる」(ヒューム1995:248)ことが、今日の英文学批評の立派な課題になりうるのである。ロビンソン・クルーソー物語のテキストが、カリブ海言説であることを隠蔽されて読まれてきたことに対する見直しの作業である。同時にそれは、「カリブ海の島々はそのほとんどが、道路も、学校も、住宅も、人々の生活水準そのものも劣悪な状況」であり、「経済的苦況は覆うべくもない」「経済水準は極度に低い」という

カリブ海と『ロビンソン・クルーソー』

現状を歴史的にどのように見るか、それに対する歴史学における見方の変化とも関連していると思われる。

そのテキストで言及された海や島が「カリブ海」に属することを再確認することによって、ロビンソン・クルーソー物語のテキストに、今日的な意味を見いだすことができるほど、「カリブ海」意識はロビンソン・クルーソー物語の関連で隠蔽されてきた。あるいは別の言い方をすれば、「カリブ海」であることを隠蔽しようとする何らかの力が働いたということであろう。その力が何であったか、カリブ海に焦点を当てることによって、その力を探り当てる端緒となるというべきだろうか。もとより、そういう課題を提唱しているヒュームはイギリス国内で仕事をしているから、それと同じ課題がわれわれ（私を含めた日本人の人々というくらいの意味で）にも同じように課題となるかどうかは、語っていないのはもちろんのことである。ヒュームは、イングランドのエセックス大学で教鞭をとる先生であり、招聘講演のためなどで日本を訪れることはあっても、彼が主として語りかけるのはイギリス国内の学生たちである。彼の著書も、もちろん英語で書かれている。彼は、そのような枠組みのなかで自分の仕事をしている。われわれとしてロビンソン・クルーソー物語とカリブ海をどういう視点から結びつけたらいいか——それは、本論の課題の一つである。

ディズニーランドに作られた人工的空間の「カリブの海賊」、食人種を意味する「カニバル」という言葉、リゾート地としてのカリブ海、イギリスでも日本でも英文学史上に今日もなお生き残るロビンソン・クルーソー物語のテキスト、これらによって、世紀末の現代日本に生活するわれわれにも、「カリブ」とその海域をめぐる言説が伝えられていることになる。「カリブの海賊」のショー空間で経験する光景は歴史上の現実そのままでない。先にも述べたとおり、カリブ海の家賊たちの歴史的事情と離れてかなり自由に造営されているようである。そのように歴史に無感覚であるのは、ポストモダン時代の消費社会における「歴史感覚の消失」の一つの兆候ともみなされる光景である（Jameson 1992:179）。あるいは、次のような見方

もある。「ディズニーランドが想像の世界として提示されるのは、それ以外は現実なのだとわれわれに信じさせるためである。実際のところは、それを取り囲むロサンゼルスもアメリカもすべてがもはや現実ではなく、ハイパーリアリティとみせかけの秩序に属している」(Baudrillard 1992:153)と。つまり、外の「現実」の世界、つまり産業資本主義経済の世界が、あまりにも嘘っぱいなので、ディズニーランドというあからさまな嘘の世界をみせつけて、「現実」の世界をそれとの比較によって少しでも現実らしくみせるためだ、というのである。資本家にとって重要なのは、カリブ海に実際何が起こったかではなく、「カリブの海賊」に関わるアメリカ大衆消費者の「共同幻想」を満足させることである。ただ、それが東京（実は千葉）に現出したとなると、そこにいるのは、カリブの海賊というものに「共同幻想」などもち合わせない人々が大多数のはずである。いったい何を待って、何のためにそこに並んでいるのであろう？

同じ様に、ロビンソン・クルーソー物語のテキストでわれわれが読むことは、現実には起こったとされることの再現とはもはや今日ではみなされていない。歴史学者による証言もある。すなわち、デフォーは、「多くの航海記、旅行記から、自由自在に材料とヒントを得て、ロビンソン・クルーソーの「生涯と冒険」を創りあげたのである」(増田1989:4)と。ただし、『ロビンソン・クルーソーの生涯と不思議で驚くべき冒険』に付された原著者＝体験報告者＝ロビンソン・クルーソーの言明として、その内容があくまでも「事実の正しい記述」であり、「この中には虚構らしいものはまったくない」と主張されているのである（平井正穂訳『ロビンソン・クルーソー（上）』7ページ、原著序）。これは、読者に対するポーズとでも言える言葉であらう。

「カリブの海賊」が造営されている東京ディズニーランドは、「京成電鉄、三井不動産などの出資により設立された不動産会社オリエンタルランドの誘致に応じたディズニー社が、カリフォルニアとフロリダで経験済みのテーマパークの設計・建築・運営のノウハウを日本に持ち込んだ結果、

カリブ海と『ロビンソン・クルーソー』

生まれたものである。その資金はすべて日本側が調達し、東京ディズニーランドの所有・経営の母体であるオリエンタルランド社は、ディズニー社に対し、一定額の特許使用料を支払っている」(能登路1990:226)。「ディズニー社」とは、周知のとおり、アメリカ合衆国の娯楽産業におけるリーディング・カンパニーとして位置付けられる株式会社である。「ディズニーランド」というその会社の商品はずでにアメリカでニカ所、そして東京(千葉)、パリに進出し、「ディズニーランドの世界戦略」があるのだそうである。

一方、『ロビンソン・クルーソーの生涯と不思議で驚くべき冒険』は、18世紀前半にロンドンで書かれ、1719年に出版された。作者は「今日ならタブロイド・ジャーナリズムと呼ぶようなものに精力をそそぎ」「犯罪、自然災害、超常現象について記事を書き」(West 1999: xii)、その執筆によって生活をしていた。それを迎えた読者は、もちろん、ロンドンの読み書きのできる市民たちである。そのようにして英語で書かれたテキストが、特別な理由によって、その筆者でさえ夢想だにしなかったであろう今日の日本にまで「英文学」作品として伝えられている。

従来、そうしてロビンソン・クルーソー物語のテキストが今日まで伝えられた理由は、そのテキストが「文学」だと見なされ、「英文学」の伝統を構成するとされてきたことによる。英文学の名だたる作品群の一つに数えられるテキストである。だが今や、その文学の地位自体が、何かの理由によって特定のテキストに付与されたものだ、と考えられるようになっていく。同じ英語の文字で書かれたテキストであっても、文学とみなされるものとそうでないもの、その区別はどこにあるのだろうか？　そういう疑問が根本にある。そうすると、様々なテキストのなかから、特定のイデオロギーに基づいて取捨選択がなされ、その結果として「英文学」ができあがったとするのが真相のようなのである。例えば、同じデフォーの作品でも、『ロビンソン・クルーソーの生涯と不思議で驚くべき冒険』は文学作品とみなされ、その一方で、『最も悪名高き海賊たちの略奪と殺人の物語』

は単なる歴史史料のように扱われてきた。後者の作者がデフォーであることが確認されると、デフォーの名前が放つ権威によって、そのテキストもまた文学作品ということになる可能性は大きい。

また、日本で「英文学」が主として流通する場となってきた大学が、もはやそのような流通の主体として行動し、英文学を理解するとされる人々を再生産し続けることができなくなっている事情もある。もはや日本における少数のエリート階級を構成するわけではない大学生にとって、「文学」はただそれだけで重要な意味は持ちえない。『ロビンソン・クルーソーの生涯と不思議で驚くべき冒険』のテキストが、「文学」としての地位を与えられることによって、大学という空間で読まれることの保証になりえたのは過去のこととなっている。

③カリブ海域の表象

以上のことは、実際のところ、歴史上の「現実」と、人工物やテキストによるその表象、そしてそれを受け取るわれわれ、これら三者をめぐる錯綜した問題と関連している。これまで述べた具体例で言えば、歴史上の現実とは、コロンブスの新大陸「発見」に引き続いて、ヨーロッパ人が進出した16～9世紀にかけてカリブ海域で起こったと想定されるもののことである。その表象とされるのが、「カリブの海賊」という人工的空間であり、ロビンソン・クルーソー物語のテキストである。そして、それらを受け取る人々とは、20世紀末の日本に生きるわれわれということになる。ここで言う「われわれ」には、日本人と呼ばれる様々な人々が含まれることを確認しておこう。人によっては、「カリブの海賊」は知っているが、ロビンソン・クルーソーなど知らない、あるいはその反対の場合などがありうるだろう。

ここに述べた20世紀末の日本ということの位置付けに関して確認しておきたい。近藤(1998:32 43)にならって、日本人にとっての西ヨーロッパ、特にイギリスとの関わりの3段階のうち、「第三段階」とみなすのが非常

カリブ海と『ロビンソン・クルーソー』

に的確な見方になっていると思われるからである。すなわち、

A 段階 一六世紀なかば～一七世紀前半

B 段階 幕末開国～1970年ころまで

C 段階 現在

このうちA段階は、戦国時代から徳川幕府の初期にあたり、「この時代の日本人の胸中に生じたのは、異文化／異文明への好奇心，世界観の拡大であって、優劣や先進・後進の意識ではない」。続くB段階は、鎖国を解いたとき以来、つい最近にいたるまでの期間にあたり、「パクス・ブリタニカ最盛期」にはじまった「日本の開国と近代化」の時期である。ここで言われる近代化とはすなわち西欧化にほかならず、「近代ないし文明の普遍性への信念があった。その普遍性が日本にもおよぶことに期待をよせ、モデルとしての西洋をめざして奮闘努力する」という時期であった。C段階の現在とは、そのような「近代化」がほぼ達成された時期にあたる。ロビンソン・クルーソー物語はB段階の時期からすでに英文学の古典として日本に流入していた。一方の東京ディズニーランドは、開園が1983年である。C段階になってからの出来事ということになる。

では、そもそもなぜ「カリブ」言説が、このような形で現在の日本に押し寄せて流通しているのであろうか？ 私としては、15世紀末にコロンブスの新大陸発見を契機にして始まったヨーロッパ拡大の動き、いわゆる「近代世界システム」を形成する動向に関連させるべきだと思う。そういう歴史過程の一部として位置付けることによって、「カリブの海賊」の場合も、そしてロビンソン・クルーソー物語のテキストも、よりよく理解可能になるはずである。そうすることによって、これらの様々な「カリブ」は、今日の日本における教育の中への組み込み、大学教育の機能の一部にすることができると考えている。

学生にとってそういう読みは、カリブの海賊というショーやロビンソン・クルーソー物語のテキストを、学生が高校生のときに「世界史」という科目名のもとにまとめられた学校教育用（大学生にとっては受験用）の

知識体系のテキストと関連を模索しつつ学ぶことを意味するだろう。学生にとって、そのようにまとめられた知識の前提やイデオロギー性をも含めて学べるようにしたい、というのが授業をする際に私が意図することである。この読み方は、次のような疑問に対する答えを構成するであろう。すなわち、なにゆえにわれわれの知識のなかにこれほどまでに不気味にも「カリブ」言説が侵入しているのか、と。それはまた、現在のわれわれの身の回りの世界がなぜそのような世界なのか、という問いに対するささやかな答えの糸口でもあるはずである。

ここで、これからの話を進めるために、「文化」という用語がもっている二つの用法に区別をしておきたい。それはウォーラステイン（2000）が用いた区別である。それによると、一方の用い方（ウォーラステインの言う「用法Ⅰ」）では、文化はある一つの集団を他の集団から区別するまとまった特徴のことである。例えば、国家、民族、種族、まとまりのある地域などがそういう文化を持つ。もう一つの用法における文化（同じく「用法Ⅱ」）は、特定の文化集団内（これは用法Ⅰにあたる）において、あるまとまった現象が他のまとまった現象と異なる（あるいは「高級」な）ときに用いられる。例えば、子供文化、若者文化、大衆文化、学校文化、などのように用いられた「文化」がそれである。「英文学」も用法Ⅱにおける文化の一つである。それが学問としてのまとまりをそなえ、それをめぐって職業につく人々がいて、出版や関連する活動が行なわれているからである。

これを確認したうえで、「カリブの海賊」とロビンソン・クルーソー物語のテキストを考えてみると、一方はアメリカ合衆国を起源として、時に「ジオラマ」（石島1992:221）や、「アトラクション」（案内パンフレット）「ショー」（能登路1990:144）と名付けられることがあるように、一般の人々が誰にでも接近できる大衆文化（用法Ⅱ）に属し（入場するには多少高額な入場料を要するが）、「ディズニーランド・ファンのあいだでは、いまだに最高傑作との声が高い」（能登路1990:144）のだという。ただし、

カリブ海と『ロビンソン・クルーソー』

それを製作するために資本を提供した意志決定の主体は、大衆とはとても言えないエリート階層に属する人々であろう。だから「カリブの海賊」は、表面的に大衆文化を装いつつ、消費者としての大衆向けに作られた文化と言った方がより適切であろう。ディズニーランドの日本進出が「八〇年代の日本における最大の文化的事件」(能登路1990:225)というのは、用法Ⅱの文化における「消費者文化」の日本への侵入が大きな注目を浴びたということであろう。

他方『ロビンソン・クルーソーの生涯と不思議で驚くべき冒険』は、イギリスを起源として生まれた文字テキストである。それが、19世紀の頃からエリート階層のあいだで流通させられたので、「英文学」という「高級文化(ハイ・カルチャー)(用法Ⅱ)」のひとつとして位置付けられた。「高級文化」という言い方は誤解を招くかもしれない。というのは、そのテキストを他のテキスト群から区別する理由を付して、「高級文化」に位置付ける作業が行なわれたということである。そして、そのとおりだと容認されてきた歴史的経緯があるということであって、「英文学」が固有の性質として「高級」というわけではないからである。また、それが日本に移植されたときには、大学の英文科が主たる受け入れ窓口になった。そうして、大学に属する文化(用法Ⅱ)とみなされたことによって、その『ロビンソン・クルーソー』テキストは、日本の教育制度に密接に組み込まれている。大学はもともとエリート階層の文化を再生産するための制度であったことはいうまでもない。

Ⅱ 英文学史とロビンソン・クルーソー物語

① 『ロビンソン・クルーソー』はどこにある？

英文学史上で伝統的に無頓着にも作品名が『ロビンソン・クルーソー』として記載され、伝えられているテキストをめぐって、現在、その英文学史の大きな書き替えが行なわれつつある、と私は思う。それは先にも述べ

たように、日本が「近代化」を成し遂げた現在、日本と西ヨーロッパとの関わりでC段階に達したことの一つの兆候とも言えるものである。過去から伝えられたテキストをめぐっては、いつもその現在にふさわしい読解が求められる、というか、そのような読みがなければ、そのテキスト自体も生き延びていかないであろう。現在行なわれつつあるそのような書き替えの様子を、伝統的な文学史の「崩壊」と名付け、爽快な光景だと言う人もある（富山1994）が、それは過去に構築された文学史が、現在のわれわれには適合しなくなったことの現れ、と言い換えていいだろう。特定の時代において文学として他のテキストから区別されたテキストに対して、その区別の根拠となった基準を所与のものとしなないということである。文字テキストを「文学」と「非文学」に本質的に区別をしない、あるいは、そういう区別はない、という考え方がその根底にある。

先にも述べたとおり、『ロビンソン・クルーソー』として伝統的にわれわれに知られているのは、無人島にただ一人とり残されたイギリス人が、そこで28年ものあいだ（正確には28年2ヵ月19日）、孤独のうちに暮らしたという少年向け冒険物語（少女ではないことに注目）としてであろう。ところが、先にも述べたとおり、そのような読書解説風の思い込みを持たずに実際にその作品を読んでみるならば、その解説による物語像がいかに誤ったものであるかは直ちに気付く。もともとの『ロビンソン・クルーソーの生涯と不思議で驚くべき冒険』が読まれる前に、冒険物語としての「ロビンソン・クルーソー物語」像が一人歩きして現代に流通しているのである。そのようにして『ロビンソン・クルーソーの生涯と不思議で驚くべき冒険』ではなく、『ロビンソン・クルーソー』が普及するに到った歴史的経緯については、岩尾（1994:19~28）が述べており、さらに詳しくはM・グリーン（1993 原著は1990）が有益である。これらの見直しは、つい最近にあたる1990年代の仕事であることも注目すべきである。

デフォー以後に書かれた類似する物語類は、「ロビンソン物語」として言及される。そのときに、一人であるいは複数の人物で、孤立した境遇に

カリブ海と『ロビンソン・クルーソー』

置かれた人(々)がどのようにその苦境を乗り越えていくかという側面に注目が集まっているし、読む側もそこに注目して読むことになる。もともと『ロビンソン・クルーソーの生涯と不思議で驚くべき冒険』の物語が実際にどんな物語内容であるかにほとんど関わりなく、多くの人がほぼ同じような期待感を抱きながらその作品を読むことになっているのである。

しかも、『ロビンソン・クルーソーの生涯と不思議で驚くべき冒険』について、たいていの日本版英文学史がそのような作品として言及している。そのうえ、そのように大学で教えられ、あるいは、読書案内として文字になっている。その事実によって「文学」としての地位を保証され、先入観がもたらす事態はさらに増幅されているといっている。

やがて、ロビンソン・クルーソーの無人島での生活は、単なる冒険物語にとどまらず、宗教的な色彩を帯びて受けとめられている。例えば、戦後(すなわち第二次世界大戦後)の日本における標準的な英文学史とされる斎藤勇(第4版1957)における記述がある。その記述では、テキストは、*The Life and Strange Surprising Adventures of ROBINSON CRUSOE, of York (1719)*として言及されているが、物語内容の説明はこうである。

どこの村にでもいそうな典型的イギリス人が無人島に漂流して、神に信頼しつつ生活条件を改めて行くという簡単な筋に、作者自身の数奇な経歴を織り込んだものである。...

ここで「作者自身の数奇な経歴」が何を指すかは明確ではないが、先にも述べたとおり、『ロビンソン・クルーソーの生涯と不思議で驚くべき冒険』がそういう「簡単な筋」ではないことは言うまでもない。さらに、ここにいたってロビンソン・クルーソー物語を一つの契機として、日本の英文学研究のなかに宗教的観点がいったことは確実である。著者の斎藤勇は1887年の生まれで、1923年に東京帝国大学の助教授となり、47年に定年退官し、その後は東京女子大学長(1948-54)、国際基督教大学教授(1954-64)を歴任した。斎藤が英文学界で重きをなしたのは、先に述べた「日本の開国と近代化」の最終段階にあたる時期にあたり、英文学におけるオピニオン・

リーダーとしての存在価値は十分であった。またその権威も絶大であっただろう。これについては、「そのあと [漱石が教壇を去って作家になったあと], 斎藤勇先生が現れて、アカデミックなディシプリンとしての英文学研究を確立したのですが...プロテスタンティズムの精神が強烈なバックボーンとして通っているものでしたね」という証言がある(高橋1990)。そこにも述べられているとおり、「プロテスタンティズムの精神」は、日本の戦後における近代化の問題と重なってくることになる。これは後に検討することにしよう。

あるいは、子供向けに翻案や書き替えが行なわれた例が多数ある。その一つは、著名な英文学者である中野好夫の翻案による『ロビンソン漂流記』である。最初は1965年に講談社「少年少女世界文学全集」の第5巻として刊行された。現在も、新書版のペーパーバックとなっているが、同社の「講談社青い鳥文庫」のうち「世界の名作児童文学」シリーズとして収められ、表紙には「ダニエル=デフォー/作 中野好夫/訳」と記載してある。その本の巻末に付された「訳者」中野好夫による「解説」では、先にも引用したとおり、

ロビンソンのお話——それはもう紹介するまでもないでしょう。ロビンソン・クルーソーというひとりの男が、難船して大洋の無人島に漂着する。ふつうならばそのままうえ死にでもしてしまうところですが、ロビンソンはあらゆるちえをはたらかせて、その無人島に着々と人間の生活をつくりあげていく——そうです、答案はそれでけっこうです。

と記載されている。ちなみに裏表紙には「小学上級から」とあり、「28年間のひとりきりの大冒険。18世紀イギリスで生まれた世界的古典名作！」とある。実際はロビンソン・クルーソーが「ひとりきり」だったのは24年間であり、その後は先住民のひとりと一緒に暮らすことになるのであるが。

『英米文学辞典』(初版は1937年、第二版が1961年、第三版1985年)の項目にも、*ROBINSON CRUSOE, The Life and Strange Surprising Ad-*

カリブ海と『ロビンソン・クルーソー』

ventures of の項目があるが、上記の斎藤勇(1957)の記述の影響をじかに受けていることが文字使いにも現れるほど一見して明らかである。

典型的な当時の中流人が無人島に漂着して、神に信頼しつつ生活条件を改めて行く過程を描いたものである。筋は単純であり、しかも、構造上の統一や叙述の簡潔さに欠けているが、飾りの少ない筆でつぎつぎに事件を述べ、細部を綿密に描写して、単純な話を面白く、実感をもって読ませる効果をあげている。

さらに時代がくだって、宮崎孝一(1991)にいたっても、「『ロビンソン・クルーソー』を読んで、多くの人がまず感ずるのは、クルーソーの信心深さと、神の摂理に対する言及の頻繁さであろう」(26)と述べている。

このようにして広まったロビンソン・クルーソー像は、先にも述べたように、デフォーによるロビンソン・クルーソー物語の一部にすぎないのである。それをまず確認しなければならない。出版当時の事情との関連で言えば、1719年に『ロビンソン・クルーソーの生涯と不思議で驚くべき冒険』が「本人によって書かれた」と明記された書物の形で出版され、数か月後に『ロビンソン・クルーソーのその後の冒険』、そして翌1720年には『ロビンソン・クルーソーの生涯と驚くべき冒険の間の反省録』が出たのである。著者名に「ロビンソン・クルーソー」の名前を冠してこれら3点が出版され、これらが本来の「ロビンソン・クルーソー物語」の全体ということになるが、これらのうち、無人島での一人暮らしの部分は、最初に出た『ロビンソン・クルーソーの生涯と不思議で驚くべき冒険』のうち、ほぼ半分強の分量を占めることになる。その事実を指摘するだけでも、いかにその部分が特別視され、強調されて流通しているかが分かってしまうものである。私も含めて多くの人々が、そのようにして流通する先入観に飼い馴らされ、その先入観を通じてしか読めなくなっている。それはロビンソン・クルーソー物語のテキストについて間違っただけを言っていることにはならないが、それにしても、その一部を取り上げて、あたかもそれが全体であるかのように話すことになるだろう。

②絶海の孤島

もう一つの例として、ロビンソン・クルーソーが28年間暮らした島が「絶海の孤島」「大洋の無人島」であるという記述が流通している。実際には、ロビンソンが暮らした島は、南アメリカを流れてカリブ海にそそぐオリノコ川の河口近くに位置しており、「この河の河口というか湾内にあったのだ。そして、西および北西に見える陸地は、オリノコ河河口の北部にあるあのトリニダード島だったのである」(平井正穂訳上巻288)と本文中にも記してある通りである。その位置関係は、テキストを読めば、『ロビンソン・クルーソーの生涯と不思議で驚くべき冒険』のタイトルページにも明記してある。この事実は、ごく最近になってさえ、日本では増田(1989:4)、イギリスでもヒューム(1995,原著は1986)がわざわざ指摘して述べる必要があると感じたのであり、このようなごく最近になってさえもそれをあらためて指摘しなければならないこと自体、「絶海の孤島」「大洋の無人島」という誤解がいかに広く浸透しているかを占う指標となるであろう。

上記の斎藤(1957)はもちろんであるが、中野(1965)の解説でも「絶海の孤島」という言い方がなされており、「カリブ海」への言及はない。さらに、1971年に出された「講座英米文学史第8巻 小説Ⅰ」所収の桜庭信之「Ⅱ 近代小説の誕生」のうち、「*Robinson Crusoe* 論」でも、やはり、その島がカリブ海に位置することは重要なこととはみなされておらず、言及もなされていない。重要なのはやはり、宗教的な寓意を読み取ることである。『英米文学辞典』の項目にも「カリブ海」への言及はない。

なぜそのような「絶海の孤島」を舞台として、宗教的色彩に染まった「冒険物語」として受けとめられるようになったのか？ ロビンソン・クルーソーが、島で一人暮らしをした24年間の部分がそれにあたるわけである。もちろん、そういう文学史を記述した時期のその人々にとって、他の部分に言及することを忘れたように見えても構わないと思われるほど、その部分が重要な意味を持った、ということである。それは事実なのであろう。だが、そこをこれらの人々が肥大化して受けとめたということは、同時に、

それ以外の部分について、何かの理由によって沈黙するようになった、ということでもある。冒険という光の部分に対して、いわば闇に閉ざされた暗い陰の部分があるということである。あるいはむしろ、冒険という光の当たる部分を意識的につくったことによって、陰の部分が無意識のうちに作りだされたというべきだろうか。

無意識のうちに陰が作りだされたとする後者の見方から言えば、『ロビンソン・クルーソーの生涯と不思議で驚くべき冒険』に本来含まれるはずの部分を隠蔽しようとする力が無意識的にせよ作用したということになるだろう。それは、あるテキストに出会って、それを何かしら理解可能なものとして行なう読者の側の行為である。テキストは、全体としてつねにそこにあつたし、今もある。ところが、たいていの人はおそらく、解説や読書案内などに十分に飼い馴らされて読むことになってしまう。テキストに直接向き合うというのは、なまやさしいことではないのである。そのテキストを理解しようとする、やはり、読む人の事情がその読みに反映されていく。ロビンソン・クルーソーの物語を、冒険物語として読むのも、宗教的寓話として読むのも、読みにおける理解のメカニズムが働いた結果というべきであろう。

そのような過程をへて誕生したのが、ある場合には「子ども用に毒抜きされ、清潔化された『ロビンソン・クルーソー』」（富山1998:257）という冒険物語であり、また別の場合には、「神に信頼しつつ生活条件を改めて行く過程」の物語である。そのような読みには、当然ながら陰となった部分、死角となった部分が生じるのはやむをえない。その結果としてこそ、そのテキストは「英文学史」が確立する19世紀末から20世紀初頭にかけて、その制度のなかに占有すべき位置を見いだしていったのである。ここでは、「神に信頼しつつ…」という読みが、戦後の日本で大きな影響力をそなえていたことを確認しておこう。

これと関連して触れておきたいのは、1719年の『ロビンソン・クルーソーの生涯と不思議で驚くべき冒険』の受け取られ方である。出版の当初にお

いては、必ずしも18世紀のロンドンのジャーナリズムの世界の話題をさるうほど人気が高かったわけではなかった。

『ロビンソン・クルーソー』については、いくつかの神話がある。／まず、たぐい稀な漂流談として人気を呼び、爆発的なベストセラーになった、という説があるが、これは正しくない。たしかに評判になり、当時の本としてはよく売れた。しかし、10版約1万部あまりを売るのは34年もかかっているから、…当時のふつうの航海記なみ、ないしはそれよりややよい売行き、と考えればいだろう。版をかさねてベストセラーになるのは、むしろ19世紀にはいつてからである。(増田1989: 3)

19世紀になってから、新たに脚光を浴びて、ベストセラーとしての地位を獲得した、というのが実情である。

そうしてベストセラーになった19世紀のころから、やがて『ロビンソン・クルーソーの生涯と不思議で驚くべき冒険』に対する死角が生じて、現状のような事態に及んだものと推測する。日本が幕末の開国から近代化に着手した頃のことである。やがてその物語は日本にも移植され、翻訳書や翻案となり、少年少女文学全集にも収録された。『ロビンソン・クルーソー』や『ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険』がそれである。それと同時に、テキストに付された解説や説明にも、あるいは、英文学史で取り上げられる際の記述からも、17世紀末の「カリブ海」に関する事柄がすっぽりと抜け落ち、「絶海の孤島」になったのである。そこには、何かしら意図的な力が働いたのではないかとさえ思われてくる。あたかも誰かが、カリブ海に関しては沈黙せよと命じたともいうように。これについては、次項の「近代主義的読解」において考察してみることにしよう。

ところで、冒頭で述べたディズニーランドの「カリブの海賊」の場合には、一見すると、反対に歴史上のカリブ海域で行なわれた陰の部分をもことさら強調しているかのように見える。略奪や殺人があり、拷問があり、人身売買の有様までもがそこにある。もしもこれに、インディオ虐殺や、奴

カリブ海と『ロビンソン・クルーソー』

隷（インディオ，黒人），黒人奴隷貿易，移民労働者問題などが加わることになれば，「カリブの海賊」は，カリブ海域の歴史に残る陰の部分のまさに立派な表象と言えるであろう。

カリブの状況は，そこで展開されたヨーロッパの帝国主義活動のために，世界中の植民地支配における最悪の要素を，一身に体現するものとなった。たとえばその先住民，すなわちカリブ人とアラワク人は，ほとんど完全に根絶されてしまった。またそこは，ヨーロッパ列強国の海賊行為による略奪や殺戮の舞台とされた。さらに奴隷貿易およびプランテーションでの奴隷制は，故郷の剥奪や残虐行為を引き起こし，奴隷制の後継者たる年季労働システムは，契約の帰国の条件が反古にされたために，中国人やインド人を，カリブ海に「座礁」させる結果となった。（アッシュクロフト，グリフィス，ティフィン1998:260）

このように列挙して対照すると明らかになるが，ディズニールンドの「カリブの海賊」には，インディオや黒人に関わる部分がない。アフリカからカリブ海域に「中間航路」を経て奴隷として連れて来られた黒人の数に関する統計は，正確には把握されていない。だが概数として推定された数字はある。それによると，イギリス領カリブ海諸島の165万5千人を筆頭にして，フランス領，スペイン領，オランダ領，デンマーク領を合わせて，460万人に及ぶと推定されている（増田1998:132）。にもかかわらず，「海賊というアメリカ人の共同幻想」（能登路149）を演出しているとされるその場面には，海賊の残虐行為は確かにそこに表象されているが，人種差別主義に関わる部分は丁寧に削ぎ落としてある。それについては，海賊行為を働いたのは白人たちであったし，海賊が跋扈し始めた時期には，すでにインディオはカリブ海からほとんど姿を消し，黒人が住民の中心になっていたからだ，ということかもしれない。

だが，実は，「カリブの海賊」に白人たちだけが登場することこそ，「近代化」について抱いた西ヨーロッパの側の，意識的にせよ無意識的にせよ，ナルシシスティックな自己満足が込められていると思われる。すなわち，

自分たち白人は、自分たちの力で、そのような野蛮な行為に終止符を打ったのだ、そこにあるのは、そのような野蛮行為をしていた暗い過去の記念碑のようなものだ、と。

なるほど、白人にとって「カリブの海賊」が「最高傑作」と称されるわけである。また、インディオや黒人が登場しないわけである。黒人に関わる人種差別問題はいまだに解決のつかない難問題であり続けており、まだまだ生々しい問題のままである。これはまさしく手強い「現実」でありうるので、ディズニーランドのような「想像の世界」にはふさわしくない。歴史上の事実としては、反対に、黒人たちが耐えかねて反乱を起したり、白人を襲ったりした事実もあったのである（増田1998:131 35）。

インディオにいたっては、そのインディオたちが絶滅してしまったことにより、どのような残虐行為がどれほどの規模で行なわれていたのかさえも、その全体像はいまだに明確なところは明らかになっていない。これについては、同時代に発せられた抗議の声として、ラス・カサス（1976）がある。さらに、「いかなる権利をもって土地がその住民から奪い去られるのか」（ヒューム1995:313）が問題であること自体、最近になってやっと注目され始めたばかりと言われるとおり、カリブ海のインディオをめぐるでは、どのように問題を設定すべきかさえもまだ未知数で手探りの状態であるといっても過言ではない（グリーンブラット1993:第1章参照）。

引用文献

アッシュクロフト、グリフィス、ティフィン（1998）『ポストコロニアルの文学』青土社

石島晴夫（1992）『カリブの海賊ヘンリー・モーガン』原書房

岩尾龍太郎（1994）『ロビンソンの砦』青土社

（1999）「浮遊する食人種記号」『思想』1999年第三号、岩波書店

ウィリアムズ、E.（1978）『コロンブスからカストロまでⅠ、Ⅱ』岩波書店

川北稔（1996）『砂糖の世界史』岩波書店

カリブ海と『ロビンソン・クルーソー』

- (1997)『ヨーロッパと近代世界』放送大学教育振興会
グリーン, M. (1993)『ロビンソン・クルーソー物語』みすず書房
グリーンブラット, S. J. (1993)『悪口を習う』法政大学出版局
『コロンブス航海誌』林屋永吉訳(1977)岩波書店
『完訳コロンブス航海誌』青木康征訳(1993)平凡社
近藤和彦(1998)『文明の表象 英国』山川出版社
斎藤勇(1957)『イギリス文学史』第4版, 研究社
桜庭信之(1971)「Ⅱ 近代小説の誕生」講座英米文学史『小説Ⅰ』所収, 大修館書店
ジョンソン, チャールズ(1983)『イギリス海賊史』上下, リプロポート
高橋康成(1990)座談会「研究の対象としての文学」での発言, 『文学』季刊
第1巻第1号1990年冬
デシャン, ユベール(1965)『海賊』白水社
デフォー, D. 佐山栄太郎訳(1967)『ロビンソン・クルーソー 生涯と冒険』
旺文社
中野好夫による翻案(1995)『ロビンソン漂流記』講談社, 同社刊「少年少女文学全集第5巻」(1965)の新版として刊行
平井正穂訳『ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険』(1959)筑摩書
房版世界文学大系15「デフォー スウィフト」に収録
平井正穂訳(1967)『ロビンソン・クルーソー(上)』岩波文庫
平井正穂訳(1971)『ロビンソン・クルーソー(下)』岩波文庫
富山太佳夫(1994)「文学史が崩壊する」『文学』第5巻第1号, 岩波書店
(1998)ユートピア旅行記叢書第2巻17世紀イギリス『月の男/新世界史 光輝く世界』に付された「解説2 航海, 帝国, ユートピア」
能登路雅子(1990)『ディズニーランドという聖地』岩波書店
ヒューム, P. (1995)『征服の修辞学』法政大学出版会
ヒル, クリストファー(1999)『十七世紀イギリスの文書と革命 クリスト
ファー・ヒル評論集Ⅰ』法政大学出版会
増田義郎(1989)『略奪の海カリブ』岩波新書
(1998)『物語ラテン・アメリカの歴史』中公新書
宮崎孝一(1991)『ダニエル・デフォー アンビヴァレンスの航跡』研究社出版
モンテーニュ, 荒木昭太郎訳(1967)『エッセー』中央公論社
ラス・カサス, 染田秀藤訳(1976)『インディアスの破壊についての簡潔な報告』岩波文庫(1542年に書かれたもの)
『日本経済新聞』2000年7月8日付け

『研究社新英和大辞典』(1980年第5版)

『英米文学辞典』(1985年第三版)

Baudrillard, Jean (1992), 'Simulacra and Simulations' in Peter Brooker(ed), *Modernism / Postmodernism*, Longman, 1992.

Defoe, Daniel (1965), *Robinson Crusoe*, edited with an Introduction by Angus Ross, The Penguin English Library

Jameson, Fredric (1992), 'Postmodernism and Consumer Society' in Peter Brooker (ed), *Modernism / Postmodernism*, Longman, 1992.

Wallerstein, I. (2000), 'Culture as the Ideological Battleground of the Modern World-system' in Diana Brydon(ed), *Postcolonialism : critical concepts in literary and cultural studies*, Routledge

West, Richard (1999), Introduction to *A General History of the Robberies and Murders of the Most Notorious Pirates*, Carroll & Graf Publishers, Inc.
Dictionary of National Biography

The New Cambridge Bibliography of English Literature, ed. George Watson, Cambridge U.P. 1971.